




論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者 本間 敬喬	
論文担当者	主査 新村 健 
	副査 越久 仁久 
	副査 岸本 裕亮 
学位論文名	Impact of skeletal muscle mass on functional prognosis in
	acute stroke: A cohort study
	(急性期脳卒中患者の骨格筋量が機能的予後に与える影響：前向き
	コホート研究)
論文審査の結果の要旨	
<p>加齢に伴い生じる筋肉量および筋力・身体機能の低下はサルコペニアと定義され、近年、脳卒中患者においてサルコペニアの構成要素、骨格筋量が重要であることが明らかにされている。しかし、報告のほとんどが亜急性期から慢性期の脳卒中患者である。よって脳卒中後の変化が反映されない、発症直後の骨格筋量が、急性期脳卒中患者の短期的な予後に及ぼす影響を明らかにすることを本研究の目的とした。</p> <p>対象は兵庫医科大学病院に入院した脳卒中患者 189 名である。主要評価項目は退院時の modified Rankin Scale(mRS)で mRS 0-2 を転帰良好群、3-6 を転帰不良群とした。骨格筋量は発症 72 時間以内に生体電気インピーダンス法を用いて計測した。得られた四肢の筋肉量を身長(m)の二乗で除した数値を骨格筋指数(SMI)として用いた。</p> <p>転帰良好と転帰不良との間で統計学的に差があった項目を説明変数としたロジスティック回帰分析を行ったところ、心房細動の併存[OR 14.95; 95% CI, 2.45-91.39; P = 0.003]、入院前 mRS [OR 2.22; 95% CI, 1.05-4.68; P = 0.036]、脳卒中重症度 [OR 1.32; 95% CI, 0.12-1.56; P = 0.001]、SMI [OR 0.31; 95% CI, 0.11-0.87; P = 0.027]、下肢運動麻痺 [OR 0.68; 95% CI, 0.56-0.82; P &lt; 0.001]が機能的予後に影響していた。</p> <p>既知の要因に加え、脳卒中発症時に骨格筋量が低下していることが脳卒中の短期的予後に影響することが明らかとなった。対象者の骨格筋量低下の原因としては身体不活動や糖尿病の併存が影響すると考えられ、骨格筋量が短期的予後に影響する理由としては、主たる機能障害の原因が筋機能にあることが考察された。本研究は脳卒中の危険因子を有する患者や脳卒中再発予防を目的とした患者において、骨格筋量の維持が重要であることを示唆する新規性のある臨床研究であることから、学位授与に値すると評価された。</p>	